教職課程センター紀要　第８号　131-141 ページ、2023 年 12 月
Jour. Center Teacher Develop. Edu. Res., Daito Bunka Univ., No.8 131-141，2023

研究ノート

沖縄現代史の描写-辺野古在住のあるおじいの証言「オーラルヒストリー」（１）

―戦時中の暮らしから終戦まで―

Depictions of Okinawan Contemporary History Based on Testimonies of an Elderly Resident in Henoko "Oral History" (1)

: From Life During Wartime to the End of the War

渡辺　雅之

Masayuki WATANABE

Key words:沖縄戦，名護市，辺野古新基地，戦争体験聞き取り

美しい山原の山脈や、鏡のように静まり返った夕暮れ時の名護浦を眺めていると、誰がつい三分の二世紀前にこの地が戦争によって破壊され尽くしていたことを想像することが出来ようか。物的環境に止まらず、尊い命も多く失われたのである。

東江平之(名護市史「戦争編」専門部会部会長)

2010 年 3 月,語り継ぐ戦争第二集-市民の戦時・体験記録-

はじめに

日本は、1931 年（昭和 6）の満州事変から、1937 年の日中戦争、1941 年の太平洋戦争開戦を経て、1945 年の敗戦までの足掛け 15 年間に渡る「15 年戦争」の加害国であり、同時に被害国でもあった。被害の面で言えば、厚生省発表(1963 年)によれば、日本人の軍人軍属などの戦死 230 万人、民間人の国外での死亡 30 万人、国内での空襲等による死者５０万人以上、合計 310 万人以上（1963 年の厚生省発表）の犠牲をもたらした。一方、加害の面でみれば日本の侵略行為によって、アジア・太平洋各国に 2000 万人以上の死者をふくむ史上最大の惨害をもたらした。

戦争は国家間の対立を「解決」する手段として、常に人間社会に存在し続けている。そして、それは常に「自衛(防衛)」、「自国民保護」などの名目を持ち「正義」の名の下に遂行されてきた。かの 15 年戦争も例外ではなかった。結果、国策によって多くの軍属や民間人が犠牲になり、今なおその後遺症は消えていない。とりわけ沖縄は太平洋戦争史上最大の地上戦闘が展開されたことで知られている。

沖縄県は、太平洋戦争で国内最大の地上戦が展開、一般県民を巻き込んだ熾烈な戦闘が繰り広げられ、軍民あわせて 20 万余の尊い生命、財産、文化遺産を失った。地上戦だけではなく、疎開学童が数多く亡くなった対馬丸事件、那覇市をはじめ、県内市町村が被害を受けた 10・10 空襲、多くの若者が戦争にかり出され亡くなった学徒隊、戦争マラリアなど、想像を絶する被害を受けることとなった。また、戦争が終わった後も、戦争で破壊された故郷の復興は容易ではなかった。「沖縄県における戦災の状況（沖縄県）総務省」

本稿の舞台である辺野古地区のある名護市でも多くの犠牲者が出ている。平和の礎に刻まれている戦没者の数は 5703 名であり、人口比でいうと犠牲率は 19.9%である。沖縄全体の犠牲率 25.9%と比すると低めに見える数値ではあるが、28635 人という当時の人口から考えれば、生き残った方たちの家族や友人などが多く含まれていることは容易に想像できる。

このような甚大な被害が出た最悪の地上戦闘が沖縄戦であるが、まもなく敗戦から 80 年の歳月が過ぎようとしている中、かの戦争の記憶も風化しつつある。それに呼応するかのように、国内の状況は戦前回帰のような様相を示しており、人権や平和に関する日本国内の社会状況はかつてないほど悪化の道を辿っている[1]。安倍・菅

[1] 2022 年に一度廃案となった入管法「改正」案が 2023 年には可決され、在留外国人に対する非人道的な扱いが常

政権のあとを受けた岸田首相は、防衛軍事費の大幅な増額に舵を切り軍事大国化の道を突き進んでいる。その様相は近隣諸国の脅威を殊更煽りつつ、国民の「合意」を調達しているようにも見える。

こうした動きは、沖縄にも大きな影響を及ぼしている。与那国島への自衛隊ミサイル配備計画が進行し、県民の間では、宮古島や石垣島も含めて安全保障関連３文書で決定された敵基地攻撃能力が島々に置かれたミサイルにも付与されるのではないかという懸念が高まっている。

このような状況を戦史・紛争史研究家の山崎雅弘は、当たり前のように人を粗末にしてきた「大日本帝国」時代とそっくりだと述べている(『未完の敗戦』,2022 年,集英社新書)。こうした状況の中、かの加害と被害の歴史を風化させないこと、そしてそれらを次の世代に確実に受け継いでいく責務が生じている。関係者から直接話を聞き取り、記録としてまとめるオーラル・ヒストリー(oral history) である本稿がその一助となれば幸いである。

1.辺野古という地区

本稿の前提として、沖縄県名護市辺野古について言及する。辺野古は世界一危険と称される普天間飛行場代替施設の移設先として、全国の注目を浴びている地区である。那覇から 67 キロ、名護市街から南東へ 12 キロの沖縄本島東海岸に位置する総面積 1083 ㎢の比較的小さな集落である。世帯数は 1114、人口 1826 人(2019 年)を数え、高齢化が進んでいる地域でもある。

もともと、農村であった辺野古は戦後、地元の有志会が経済振興のため軍用地契約に踏み切り、1957 年に基地建設が始まった。これが現在のキャンプシュワーブである。この開発によってその後まちは急成長し、世帯数も増加した。しかし、1965 年をピークに人口は減少に転じ、現在のまち並みは 1960 年代の面影を残したままで、まるで時が止まったかのような印象を受ける。一方、辺野古ハーレー大会[2]が毎年のように開催されるなど、地域住民の繋がりは根強いものがある。

そして、辺野古は普天間飛行場代替施設のための新基地建設が進んでおり、県民らによる根強い反対運動が行われている。キャンプシュワーブのゲート付近では抗議の座り込みが継続的に行われ、新基地を監視するテント村には全国から多くの人が訪れるなど、新基地反対の運動の拠点でもある。沖縄県はホームページにおいて辺野古移設に反対の理由を 4 点あげている(沖縄県 HP)。

１既に異常としか言いようのない過重な基地負担を抱えていること。
２辺野古移設に反対する民意があること。
３辺野古・大浦湾の豊かな自然環境が破壊されてしまうこと。
４辺野古移設では普天間飛行場の一日も早い危険性の除去にはつながらないこと。

3 について沖縄県では辺野古の自然環境に関して次のように述べている。

> 辺野古新基地が造られようとしている辺野古・大浦湾周辺の海域は、ジュゴンをはじめとする絶滅危惧種 262 種を含む 5,300 （プランクトンを含めると約 5,800）種以上の生物が確認され、生物種の数は国内の世界自然遺産地域を上回るもので、子や孫に誇りある豊かな自然を残すことは我々の責任です。(沖縄県 HP)

さらに最近では、大浦湾の海底地盤の脆弱性などが露見し、予定している工期や予算の範囲には到底入らず、建設そのものが不可能ではないかという議論も出ている。また公有水面埋立法に基づく玉城知事の埋め立て不承認により、必要な土砂の 8 割は投入できていない(2023 年 8 月現在)。にもかかわらず日本政府による新基地建設の動きが止まることはない。そうした中、キャンプシュワーブ関係者、新基地建設に関わる住民、漁業関係者などが混在する辺野古地区の住民の立場は複雑なものがある。筆者が 2017 年に辺野古地区の小学校を訪ねた時に学校長から言われた「子どもたちの前で決して基地の話はしないでください。いろいろな立場の親がいますから」という言葉が象徴的である。本稿の語り手である諸喜田俊正さんも、戦後の復興期から辺野古で生計を立ててきた。その仕事はキャンプシュワーブと切り離して考えることはできなかったと言う。

諸喜田さんはお連れ合いの京子さんと共に大東文化大学特別インターンシップにおいて、3 年間に渡り多くの

態化する可能性が高まった。

[2] 「辺野古誌」によると辺野古のハーレーは旧来、地域住民の娯楽だったが、近年は字主体として各班や職域が競う行事となっており、高校生や米軍関係者も参加するイベントになっている。

学生たちを世話してくれた民泊先のご主人である。その細やかで温かい対応は、参加した学生たちの心の支えになってきた。2023 年 2 月 4 日。沖縄の社会状況や戦中・戦後史に興味を持つ学生たちと共に訪問し、おもに戦中・戦後の名護市の状況とご自身の経験を語っていただいた。

語り手
諸喜田俊正さん
1937 年(昭和 12)6 月 12 日生まれ
沖縄県国頭郡今帰仁村出身、辺野古在住

聞き手
渡辺雅之
2022 年度特別インターンシップ参加学生
金井塚理紗(書道学科)・神崎巴奈(同)・栗原佑奈(同)
五十嵐七海(日本文学科)
関根吉洋(歴史文化学科)

2. 戦争前の話-子ども時代-

（渡辺） 今日のお話は３つのパートで考えています。戦争の前の話、戦争中の話、戦争が終わってから今に至るまでの話。諸喜田のおじいが生きてきた人生というか、考えてきたことをざっくばらんに、お伺いしたいと思います。よろしくお願いします。まず諸喜田のおじいは沖縄の方なのですけれども、元々どちらのお生まれだったのですか？

（諸喜田）今帰仁[3]です。 (なきじん)

（渡辺）もともと辺野古にいたわけではないですね。

（諸喜田）そうそうそう。

（渡辺）おうちは農家だったのですか？

（諸喜田）そう、農家です。

（渡辺）農家。お父さんとお母さんが今帰仁で農業やられていたわけですね。主に作物はどんなものを作られていたのですか？

（諸喜田）作物はもうイモ[4]とかね、サトウキビ 、お米。で、あの親父は牛も。あの３頭、４頭、５頭くらいかな、おばあちゃんは豆腐づくりで生活したりしてね。

（諸喜田）朝晩のように豆腐を作る。それを売っていたわけね。私は十人兄弟なんです 。だから大変だったと思う。でも教育も受けさせてくれて。十人の子どもを育てるためにも、昔はそうとう苦労したと思う。今みたいに贅沢じゃないでしょ？で私もイモ生活。学校に行く時にもイモ炒めてから学校行ったり、米とか取れない時は結構毎回イモみたいな。まあ一番楽しみなだったのは盆正月。田舎では豚をつぶすのね 。それをだいたい 2 家族で分けたりして。

（渡辺）豚料理を食べたんですね。じゃあお父さんとお母さん、農業されながらお豆腐屋さんやって 10 人の子どもを育てた。決して生活は楽というわけではなかった。

（諸喜田）まあまあまあでもそれがみんな普通でしたね。

（渡辺）サトウキビとかお芋を作って売ったり、自分の家で食べたりする生活が普通だったんですね。

（諸喜田）あと、漁師がね、向こうもそれあの海、海のほらあの部落なんですよ。であの糸満海でとった魚と交換したりね。

（渡辺）お魚とお芋とか。

（諸喜田）それをだから、こういうまたあのいろいろと、お互いの生活に使っていただけるんです。

（渡辺）なるほど。物々交換。

（諸喜田）そうそうそう。今みたいにいろいろこれ冷蔵庫もないし、全部もうあのもう木炭でね。イモ食べた後のこの、あのあれで炭でね、魚なり乾かして。おっきなざるがあるから、これを入れて、味噌汁作ってあげたり。

（渡辺）あ一保存用の、なるほど。

（諸喜田）昔は冷蔵庫無いわけ。そういう生活ですね。

（渡辺）なるほどなるほど。牛は乳をとるため飼ってたんですか？

（諸喜田）肉用です。

（渡辺）肉牛としてですか。さきほどお話しされたように、子ども時代の楽しみは盆正月やお祭りのときの親戚が集まって豚を潰したり、牛を食べたりすることだったんですね。

（諸喜田）子どもたちの楽しみはこれ(盆正月に集まって豚や牛をみんなで食べる)だったんです。今はもうバレーボールとかサッカーボールとか自由に遊ぶ楽しみもあり

[3] 今帰仁村は沖縄本島の北部、本部半島の東北部に位置する。

[4] 今帰仁村で育てられていた作物として、甘藷が有名である。銃後の救援活動では、小学生や青年学校生が集団で動員され、甘藷の植え付けが行われることもあった。甘藷は非常食としても栽培され、米軍の強制収容から帰村した際まで、種芋が生きていたという。（今帰仁村史編纂委員会『今帰仁村史』今帰仁村役場、1975。500～502 頁。）

ますでしょ。
（渡辺）ありますあります。
（諸喜田）あのね、昔は豚の膀胱を使うの。あれ乾かして、空気入れてね、これでバレーとかするの。
（渡辺）そうなの？豚の膀胱を。
（諸喜田）今の子どもらには分からんでしょうね。
（渡辺）わからない初めて聞いた。
（諸喜田）そうでしょ(笑)
（渡辺）遊び道具なかったことだね。
（諸喜田）それとコマ。コマもこれ全部自分で作って。
（渡辺）まあ、要するに遊び道具は売ってないから自分らで工夫して。言ってみれば豚の膀胱なんか食べようもないから捨てるとこだけど、それ遊び道具にしたってことだ。
（諸喜田）そうそうそう、乾燥してね。袋にしてボールの代わり。
（渡辺）へえー。おじいは 10 人兄弟の何番目だったのですか？
（諸喜田）わしゃ五番目ですね。
（渡辺）五番目、難しいとこですね一番。上からも言われて、下の面倒もみて。
（しのぶさん:諸喜田さんの娘さん)「違うさ、九番目さ。下からは、あ、上から九番目でしょ？五男の九番目」
（渡辺）あ、そういうことか、でおじいは、小学校から中学校も行ったんですか？
（諸喜田）うん。中学校行って。
（諸喜田）高校も行ってる。
（渡辺）高校は今帰仁の？
（諸喜田）そうそう。

3.戦争中のこと-名護における沖縄戦-

（渡辺）戦争がはじまったなという記憶はありますか。
（諸喜田）ちょうどね、あの。学校のあの…。1 月…何月かな？行事があったわけ。その時にあのーちょうど、日本の飛行機かと思って、で、今みたいに体育館とか無いさあね、で、あの運動の教具とか並べて、でそういうイベントあったんだけど。その時、飛行機がこう来たもんだから、案の定、あ、これ敵の飛行機かなって、
（渡辺）アメリカですね
（諸喜田）そうそう。運天港[5]ってありますでしょ？
（渡辺）それはなんですか？
（諸喜田）今のちょうどあのー。古宇利島(こうりじま)と橋できてるワルミの、あっちはあの魚雷艇のあのー。基地なんですよ[6]。
（渡辺）ああ、魚雷を発進する。
（諸喜田）で、あっちに隠れて。あっちにばんばんばんばん。それからもう全部家帰らされて。
（渡辺）っていうことは小学校の時に戦争(沖縄地上戦)が始まったということ？
（諸喜田）でちょうど。うんうん。
（渡辺）ですね。何年生ぐらいですか？
（諸喜田）三年か、そんなくらいだったかな。
（渡辺）小学校三年生の時に今の運動場みたいなところで、行事やってたらアメリカの飛行機が飛んできた。それが 1945 年とかその頃ですね。その前に小学校一年生二年生のときに戦争が始まるみたいな話はあったんですか？学校で。
（諸喜田）そうそう。だからもうバンバン(戦争に備える)訓練をしていたわけ。うちの部落でもね。
（渡辺）子ども含めて、大人も。
（諸喜田）大人も女性も準備をして。戦車もね、今のホントの戦車じゃなくて、馬車があるでしょ？それを偽装して戦車っぽくして。
（渡辺）ということは、1941 年、太平洋戦争が始まる前に日中戦争つまり中国と戦争状態にあったから、アメリカとの戦争をひかえて、戦争の準備を子どもたちも含めてやってたっていうことにもなりますね[7]。その時は戦争ってわくわくする感じ？やだなって感じだった？どっちですか？分かんない？覚えてない？
（諸喜田）うーん。最初は日本の飛行機としか思わんわけ。だから飛行機がきたら喜んでた。
（渡辺）おぁー飛行機だーって。
（諸喜田）ところが、どんどんあの爆弾落とすもんだから、それからもう親戚もぜんぶ家に帰されてそれから十・十空襲[8]になったんですよ。十・十空襲、那覇とかにバン

[5] 運天港には、海上奇襲部隊の出撃基地が置かれていた。十・十空襲では、この基地の魚雷艇も被害を受けている。（今帰仁村史編纂委員会『今帰仁村史』今帰仁村役場、1975。86 頁。）米軍の半島包囲作戦では、1945 年 4 月 9 日に運天港からも上陸した。（名護市史編さん委員会『名護市史 本編 6 教育』名護市役所、2003。143 頁。）

[6] ワルミは地名か、またはワルミ大橋かと思われる。基地の所在地は、屋我地島の古宇利大橋とワルミ大橋の間あたりかと推測。

[7] 例えば、小学校の 4 年生以上は軍への奉仕作業として、運天港の魚雷艇の避難壕作りに駆り出された。「語りつぐ戦争第 4 集」p41

[8] 十・十空襲とは、1944 年 10 月 10 日に起きた空襲の

バン来て。だんだん激戦もう、あー激戦だなって、で、うちの兄貴たちはみんな南部で戦争に行ってたんだけど、もう激しいもんだから命からがら逃げてきて助かったんだけどね。

（渡辺）そうすると太平洋戦争が始まってからしばらく沖縄は直接の戦場になってないはずだから、3 年か 4 年ぐらい経ってからですね、沖縄に飛行機が飛んできたのは。真珠湾攻撃があってから 3 年ぐらい過ぎて沖縄にだん戦争がやってきたっていう話だ。だから、おじいたちが小学校 3 年生の時はすでに戦争は始まっていて、本土空襲とか少しずつ起きたりしながら、そして 1944 年頃に沖縄にいよいよ戦争がやってきた。

（諸喜田）一番ひどかったのが十・十空襲、もう那覇がもうあれだからねえ…(悲しそうな表情)

（渡辺）でその時は怖かったですか？やっぱり。

（諸喜田）だからね。あのーまあ、部落の人たちも伊江島(いえじま)とかに収容されて、飛行場とか作りたい人がいたわけだから。あの塹壕を掘らされたり…[9]。

（渡辺）塹壕ね、塹壕っていうのは隠れるための洞窟みたいな穴みたいなものですね。

（諸喜田）このくらい 1 メーターくらいのね。山のほうにとか。

（渡辺）おじいのお兄さんたちは南部戦線に兵隊として行ったわけですね。

（諸喜田）そうそう兵隊として。

（渡辺）陸軍ですか？

（諸喜田）そう陸軍。それもあまり戦争が激しいもんだから。あのーこうリュック持って、鉄砲持ってやっとやっと逃げてきて。

（渡辺）おじいのお兄ちゃんたちは陸軍の兵隊として徴用されて、南部戦線に行けと言われたわけだね？で沖縄戦は南部戦線が一番の激戦区だったから、そこがひどい状態だったから、お兄さんたち、逃げてきた。よく逃げて来れましたね。

（諸喜田）なんかもうラッキーだよ。まあ、もうその逃げる間に亡くなった方もいるし…まあ戦争は厳しいものだったから、全部北部に来たわけ。

(学生に向けて渡辺による説明)

簡単に言うと、沖縄ってこう細長いじゃない？で、アメリカ軍は主に南部のほうから上陸してきたわけ。で、そこが一番激戦区になって、ひめゆりの学徒出陣とか鉄血勤皇隊[10]がいた南部地域がそうだった。で、諸喜田のおじいのお兄ちゃんも南部戦線に駆り出されたんだけど、あまりにも戦争が激戦区になって、もう危ないってなって、みんなはどんどん北のほうに逃げて来たって話。その逃げてくる途中で死んでしまった人もいっぱいいたってことだね。

※米軍はすぐに中部・北部地域にも侵攻してくる。そして、多大な犠牲を伴って終戦を迎えた

ことである。沖縄国際大学の吉浜教授によると、十・十空襲の目的は、米軍がアイスバーグ作戦を策定するための地理情報収集にあったという。また、那覇で十・十空襲を体験した吉峰さんは、当時の状況として、敵機の接近を知らせる警戒警報は鳴らず、多くの住民が日本軍による演習だと勘違いしたと述べる。（渡邉沙千「十・十空襲 米軍の別の目的とは何だったのか」『中央評論 No.297』中央大学出版部、2016。21 頁。）

[9] 伊江島には二つの飛行場が建設され、その建設には青年学校に通う生徒も含め、多くの今帰仁村民が徴用されていた。1944 年 8 月頃には、今帰仁村内の各小学校にも軍隊が駐屯し、陣地構築が進められたため、多くの村民や学童までもが動員されている。（今帰仁村史編纂委員会『今帰仁村史』今帰仁村役場、1975。88～89 頁。）

[10] 太平洋戦争末期の沖縄で，1944 年(昭和 19)12 月第 32 軍司令部の指示により，師範学校・中等学校の男子生徒から組織された学徒隊。翌年 4 月の米軍上陸に際して，陸軍二等兵として通信隊などに配属されたが，総数 1780 人中 890 人が戦死するという多大の犠牲をだした。

４.戦争後期から終結へ

（諸喜田）で、あのもうーうちの村の兵隊たちがあのテント張って、残党[11]になっていったんですよね。
（渡辺）残党？
（諸喜田）日本の兵隊の残党。その連中はね。まあ、あの一負けてるけど手榴弾とか投げて、抵抗したもんだから、私達はまたこっちに収容されて。あの一羽地(はじ)とかね。こっちの今のキャンプ・シュワブ[12]の前の所とか。那覇からもう長男坊なんかも来たわけよこっちに。
（渡辺）兵隊が?
（諸喜田）違う違う違う。
（渡辺）あ、人々が？
（諸喜田）一般住民がね。

(学生に向けて渡辺による説明)
どういうことかというと、まずは南部が激戦地で、結果的に４人に１人ぐらいの沖縄の住民が亡くなっている。こんな戦争は歴史上そうそうない。戦争というのは兵隊と兵隊が戦うものだってイメージあるけど、沖縄戦は特殊で、兵隊じゃない非戦闘員がいっぱい犠牲になった戦争。危ないからっていうんで、どんどん南からみんな逃げてきたわけ。それで一緒に逃げてきたのが日本兵。残党っていうか、あの日本兵もアメリカに殺されるからって一緒に逃げてきたわけ。で、この辺の地域にいっぱい、その逃げてきた住民とか、日本兵が来た。おじいは前に「実は一番怖かったのが日本兵だった」って話してましたね。
（諸喜田）そうそうそうそう、そうです。
（渡辺）それはどういうことですか。
（諸喜田）もう外人よりもこの…ね、残党兵が怖かったんです。
（渡辺）むしろアメリカ兵よりも日本、日本兵のほうが怖かった。それはなぜですか？
（諸喜田）結構あの私達はね、こっち(大浦崎収容所)にもう収容されてたけど、そこでは米とか味噌とか配給があった。でもおうちの中に…甕(かめ)とかに、いろいろ貯めておいたわけ。
（渡辺）あーストックですね。
（諸喜田）そうそうストック。でこれを取りに行くんだけど、その帰りに日本兵に全部取られてしまってね[13]。彼らは日本刀[14]持ってるし、こう怖かったから連中に全部あげて。「こっちに来る」というけど来ないわけ。
※日本兵は収容所に行こうとしなかった、ということを述べていると思われる。

(学生に向けて渡辺による説明)
要するに、おじいたちの実家では、食糧とかをストックしてた。非常時に備えてお米とかお味噌とか。ところが、あの逃げて来た日本兵がやって来て全部奪っていく。で、それを奪われまいとしたって日本刀や銃剣を持ってるから、もう…ハイってあげるしかなかった。だから日本兵が一番怖かった。で日本兵もお腹を空かしてたんでしょうね。食べ物もなくて。本土からの、補給路もほとんど絶たれていたから、沖縄は完全にその孤立の島になっていた。本土から救援物資が届かないから兵隊たちも食べる物も物資も無くて(仕方なくっていうか)、住民の残り少ない食料を奪ったりしたって話ですね。

（諸喜田）だからーあのー…、女の方は、お母さん、お婆ちゃんたちが全部、髪切ってね、男の服装で。でーもう女っていったらもうすぐ捕まえてあのーその連中はもう大変だから、外人もそうだけど[15]。
（渡辺）獣みたいな。

---

[11] 敗残兵のこと。
[12] 現在の米軍提供施設であるキャンプ・シュワブの地域一帯には、大浦崎収容所があった。大浦崎収容所は、1945 年 6 月下旬に本部半島を制圧した米軍によって、伊江村、今帰仁村、本部町の一般住民が収容された場所である。聞き取り調査によると、町村ごとにエリアが分けられ収容されたという。（沖縄県立埋蔵文化センター『沖縄県の戦争遺跡 平成 22-26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書』沖縄県立埋蔵文化センター、2015 年。286～287 頁。）
[13] 日本兵による食料強奪について、北部では、米軍から食糧をもらっていた住民をスパイだと脅し、食糧を奪っていく兵が多かった。（沖縄県教育委員会『沖縄県史 第 10 巻』国書刊行会、1989。493 頁。）大宜味村喜如嘉では横行していたという。（福地曠昭『防衛隊』沖縄時事出版、1985。109～110 頁。）例としては、「我々は、あんた方の為に戦っているのだから、食糧を出しなさい。あんた方は食べなくてもいい」と言い食糧を奪った。（北谷町史編集事務局『北谷町民の戦時体験記録集 第 1 集』北谷町、1985。33 頁。）食糧を提供することを拒否した例では「きさまらは国賊か。天皇の使者である軍人に協力できないというのか」と脅されたなどがある。また、拒否したことで殺されることも多かったという。（那覇市企画部市史編集室『那覇市史 資料篇 第 2 巻の中の 6』那覇市、1974。129～131 項。）
[14] 軍刀のこと。
[15] 民家や学校が宿舎として接収され、人々の暮らしの中に軍が入ってくる状況となり、日本兵による性暴力も問題となっていた。（沖縄県教育庁文化財課資料編集版『沖縄県史 各論編 第 8 巻 女性史』沖縄県教育委員会発行、

（諸喜田）そうそうそうそうそうそう。で全部もう髪も切って男の服装で。それでもう結構あのこの今帰仁まで行ったりして。

（渡辺）今の話は分かる？要するに女性だって分かるとレイプ、性暴力を受ける危うさがあるから、男に変装してたっていうこと。それはアメリカもそうだったかもしれないし、むしろ日本兵の中でも、心が病んでしまった人がいっぱいいただろうから、自分たちを守るために男装をしたってこと。丁度みなさんの年頃だよ。

（諸喜田）そうそうそうそうそうそう。

（渡辺）だからみんな、そんなお化粧とかじゃなくてもう、頭を丸めて坊主に…男の子みたいになって、「私は男です」みたいに振る舞ってないと…

（諸喜田）でも今はね、子どもたちにそういう話してもぜんぜん通じない…分からんよ。本当ね、戦争の、あの一苦しみというのは…そういうところを見て、経験して初めて戦争は大変なことだなあと思うわけ。

（渡辺）要するにおじいが見た戦争っていうのは、爆弾が降ってきたり、人を殺したりっていう場面ではなく、むしろその周辺にあった悲惨なことかもしれないね。戦場で撃ち合ったとか､殺したとかっていうんじゃなくて、その周りにいた、もっとなんか…怖い人間の姿があったのかもしれない。だからおじいは戦場には行ってないけど、戦争そのものの怖さというか…危うさっていうのは身に染みてるわけね。

（諸喜田）そうそうそうそうそうそう。

（渡辺）それが小学校の 3, 4 年生頃か。

（諸喜田）そうそうそうそうそうそうですね。うちのばあちゃんが芋掘りに行ったら、畑一面に弾薬が積まれてる、そんなの見た人じゃないと怖さは分からんわけ。

5.終戦後の名護

（諸喜田）(戦争が終わると)昔はもうあの一外人、マリーンはあちこちに弾薬とか置いた。芋掘りに行って袋を見つけて食料かと思って持っていたら手榴弾の袋だったなんてこともあった。

（諸喜田）開けたらもう手榴弾なわけ中身が。だから…20 個ぐらい持って来て…

（渡辺）芋だ…芋掘り行ったら手、手榴弾。

（諸喜田）だからこれもう戦果[16]だって、みんな言うわけ。昔の戦果。そういうエピソードもあるわけ[17]。

（渡辺）なるほどねー。で、その時はもう米兵が来てたってことですね？マリーンが。

（諸喜田）そうそうそう、もうもう、だから丁度あの一うちの…あの一部落の海岸に、マリーン達がいて。でいろいろ施設つくったり物資を置いたりしてた。

（渡辺）それはもう…敗戦になっていた頃それともまだの時期？

（諸喜田）そうだね。もう…(戦争が)落ち着いた時。

（渡辺）落ち着いた頃か。アメリカ軍っていうのは南部だけじゃなくてこの辺にも上陸[18]してるんですよね？

（諸喜田）あの一そうですあの一…第二、第一は嘉手納(かでな)方面でしょう。

（渡辺）嘉手納から来た。

（諸喜田）そういう作戦もあったはず。あの伊江島とか

（渡辺）伊江島。

（諸喜田）で、この近辺も来てるわけよ。今の八重岳[19]ってあるでしょ？あっちは激戦地だったわけ。日本の通信隊もあるし。あっちはだいぶ人亡くなったわけよ。だからね、慰霊（碑）[20]はちゃんと建ってるしねえ今ねえいろいろと。

（渡辺）沖縄戦は南部戦線についてはよく知られている

2016。336 頁。）

[16] 戦果とは、米軍からかすめ取ることにより得た物資の事を指す。沖縄戦によって生まれた言葉であり、戦争中や戦後にさかんに使われた。また、戦果をよしとする考えは俗に「戦果思想」ともいう。（沖縄大百科事典刊行事務局『沖縄大百科事典 中巻』沖縄タイムス社、1983。581 頁。）

[17] 戦後、アメリカ統治下時代の沖縄において「戦果アギヤー」という言葉が生まれた。米軍基地からの窃盗行為を行う者たちを意味する言葉で「戦果を挙げる者」という意味である。真藤順丈の小説「宝島」に詳しい。

[18] 西海岸を北上した米軍は、1945 年 4 月 7 日に屋部、8 日に伊豆味、9 日に運天港に上陸し、10 日には本部半島を包囲するに至った。（名護市史編さん委員会『名護市史 本編 6 教育』名護市役所、2003。143 頁。）アイスバーグ作戦に関する機密文書は下記参照。（財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室『沖縄県史 資料編 12 アイスバーグ作戦 沖縄戦 5（和訳編）』沖縄県教育委員会、2001。）

[19] 1945 年 4 月 10 日には米軍に本部半島を包囲され、八重岳付近には米軍から集中砲火があびせられた。（名護市史編さん委員会『名護市史 本編 6 教育』名護市役所、2003。143 頁。）沖縄戦八重山についての詳細は下記参照（沖縄県教育委員会『沖縄県史 10 沖縄戦記録 2』国書刊行会、1974。7～220 項。）

[20] 慰霊碑の所在地については、下記参照。（沖縄県立埋蔵文化センター編『沖縄県の戦争遺跡』平成 22-26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書、沖縄県立埋蔵文化センター刊、2015 年。330 頁。）

けど、実際にはアメリカ軍は南部戦線を迂回してこっちの方に直接上陸して来て、こちらも配下に収めてたっていう状況だね。ところで戦争が終わった時って覚えてますか？

（諸喜田）覚えてますよ。

（渡辺）それはどういう…玉音放送かなんかで聞いたんですか？

（諸喜田）そうそう、天皇陛下のあれがね、

（渡辺）天皇陛下の。「汝臣民〇〇〇にして…。」

（諸喜田）そうそうそうそうそうそうそう。集まって聞いた。

（渡辺）集まったのは学校ですか？

（諸喜田）学校に。

（渡辺）あー、「おーい集まれー天皇陛下の放送あるぞー。」って言われて学校行ったんですね。そして聞いたんですか？ラジオで。

（諸喜田）聞きましたよ全部。

（渡辺）覚えています？その時のこと。

（諸喜田）大体覚えてますよ。

（渡辺）覚えてる、どんな気持ちでしたか？

（諸喜田）だからもう本当にあのーもう…戦争終わったなあと思ってね。

（渡辺）うん、それはどっちかっていうと嬉しかった？悔しかった？

（諸喜田）悔しいもあるし…うんあのー嬉しかったもある…両方な気持ちになるわけ。

（渡辺）でも戦争中はやっぱり負けるって思ってたことない？もしくは負けないと思ってたんですか？

（諸喜田）最初は負けない!そうだったわけ。そういうあのー教育されてたからね。

（渡辺）うん、日本負けるはずないと。

（諸喜田）そうそうそうそう。で、小っちゃい時からもうバンバンスパルタ…スパルタ式にやられて。ほんと軍隊のやり方ですよ。うちの部落…ほらあのー学校の近くだったから遅刻したらもう…あのバットでね。

（渡辺）バンって？

（諸喜田）真っ黒くなるまで叩かれたりして。ほんとにもう厳しい厳しい…

（渡辺）叩き込まれたんですね、軍国主義教育[21]を。

（諸喜田）そうそうそう、ものすごく厳しい教育を受けまして。

（渡辺）「日本が負けるはずない！貴様ら！」っていう感じですか。

（諸喜田）うん、うん、そうそうそうそう。

（渡辺）それを刷り込まれていたから、日本は戦争をやっていても、負けるはずないっていう思いがあった。だけど、一方、負けたって聞いた時に、ほっとしたっていう面もあったっていうことですね？

（諸喜田）ほっとしたとこもあったよね。

（渡辺）あーやっぱり子どもにも分かったんだねどこか「いやー、そうは言ったって負けんじゃねえの？」って気持ちがあったのかもしれないね。そういう話をしてた大人とか子どもはいなかったですか、「やっぱり負けちゃうんじゃないの？」って。

（諸喜田）で、なんか、少しはそういう人もいましたよ。

（渡辺）いた？やっぱり。うんー。

（諸喜田）沖縄も攻められているし、こういう状況だから、兄弟とか戦地に行かしてる親連中とかもいたから。

（渡辺）でも、最初のラジオ聴いた時には何がなんだか分かんなかったでしょ？文語調で。

（諸喜田）全然全然、まだまだ…

（渡辺）で、それ先生が解説してくれたの？

（諸喜田）そーう、そうそうそうそう。

（渡辺）えーこれは日本が負けたっていうことで、みんな、こう下向く感じだったんですか？

（諸喜田）そう、うん。

（渡辺）はぁー…って。でもこう、心の中で、あぁ、良かったーって思う人もいた。その後はどうなったんですか。

（諸喜田）それからねぇ、生活はひどかったけど、まあだんだん援助でね。あのーあちこちからの一今でいう…NPO か。物資ももう何もない…戦争中何日も(作物なんかも)作ってないもんだから。

（渡辺）あーそうかそうか。

（諸喜田）その間に、いろいろこうしてあのーアメリカと…あのー交渉して…メリケン粉[22]とかね手に入れたのかな。

（渡辺）はい、はい、はい、はい。

（諸喜田）配給だね。今の、あのー…アフリカとかでやってる食糧支援みたいな。牛乳とかね、ミルクとか、そういうまたあのー、メリケン粉とか米とか。

---

[21] 日本の初等教育は、忠君愛国の精神を涵養するところに大きな目的が置かれていたことが特徴である。満州事変の以後、急速に戦時体制に移行することとなり、教育現場でも日本政府の要求のもと、様々な対応がなされた。（琉球政府『沖縄県史 第８巻 各論編７』国書刊行会、1971。137 頁。）

[22] メリケン粉とは小麦粉のことをさす。

（渡辺）戦争中はやっぱり食べ物は苦しかった?

（諸喜田）ないからさ、だから苦しかったわけ。さっきも話したけど、うちのおばあちゃんなんか苦しいもんだから、食べ物と思って袋をもって帰ってきたら、中身は手榴弾とか。

（渡辺）あーそうかそうか。食べ物だと思ったら手榴弾。でも、そのくらいお腹空かしてたことが多かったっていうことですねやっぱり。

（諸喜田）そうそうそうだからもう、作物植えたらもうだから、昔の田んぼとか、あの一畑行って、ちょっとずつ芽出てる…それ取ってからね。で、あの一山のシダとか。そういうもの食べたりして。で、あとはもうー…ソテツ[23]。

（諸喜田）ソテツ(の実)食べたりしてね。で、…(ちゃんと処理しないと)猛毒なんです、あれ。

（渡辺）あ、そうなのね。食べちゃいけないのね？

（諸喜田）さっきテレビでもやってましたけどね。

（渡辺）うーん…でも食べる物が無いから、そういうの食べて。で、なけなしの食べ物をストックしとくと日本兵がやって来て、「おめえら出せー！」って持ってっちゃうから、切なかったねそれは。で、戦争が終わったら、いろんなその援助が来て、食べ物が少し増えてった。

（諸喜田）その後は、残党兵は全部集めて収容された[24]。それで…あのちょっと楽になったんです。

（渡辺）安定したのね。要するにそのアメリカ軍が、残党全部集めて収容したわけだね。そしたら悪いことする日本兵がいなくなったから、地域住民は、ほっとしたって話か。はあーすごいね。それで戦争が終わった時、今帰仁にまだ居て、えーっとじゃあその後はどんな風な経過で辺野古に来たんですか。

6.戦後の辺野古

（諸喜田）戦争が終わると、残党兵の抵抗を阻止するために、私たちこっちに収容されたわけ。伊江島からまた羽地とかに。本部とか今帰仁…あとどこだったかな？3部落ぐらい全部こっちに収容されて[25]。

（渡辺）アメリカ軍の命令で、「お前らの部落から何人かこっちへ移動しろ」ということですね。

（諸喜田）いやいや家族全部。

（渡辺）あーそういうことか、強制移動か。

（諸喜田）あの一残党兵たちが夜いろいろ抵抗するもんだからこれ…結構アメリカとしてはもう許さんと思って全部集める。彼らは一般住民がやっていると思ってるわけよ。それで住民一括して全部こっちに収容[26]した。

（渡辺）つまり、抵抗運動してるのは一般住民かもしれない。だから、お前ら危ないやつらだから、こっちに強制的に移動しろと。いうこと[27]？

（諸喜田）そう。

（諸喜田）いまの GMC ってあるでしょ？あのーアメリカのトラック GMC。で、あれ 10 台くらい並べてね、これ外人が子どもたち全部載せて[28]運んでいく。

（渡辺）ふーん…ここにおいとくと弾薬とかいっぱいあって、いろいろ抵抗運動して面倒くせえやつらだから、お前らこっちに移動しろと、なんもない所に。で、それが辺野古だったってこと。

（諸喜田）そうそうそう。

（渡辺）住民を収容した収容所。アメリカの占領下だか

---

[23] 戦後末期より食糧配給は途絶え、保存食も食べ尽くされていたため、中毒の危険を冒しつつも、飢えをしのぐためにソテツなども食糧とした。(沖縄県教育庁文化財課資料編集版『沖縄県史 各論編 第 8 巻 女性史』沖縄県教育委員会発行、2016。363 頁。)

[24] 米軍は日本兵と民間人を選り分けて収容し、日本兵は捕虜収容所（PW 収容所 ※Prisoner of war の略）に収容された。また、作業現場などでは、民間人と識別するために、上着の背中に PW とペイントされた。（名護市史編さん委員会『名護市史 本編 6 教育』名護市役所、2003。146～147 頁。）

[25] 大浦崎収容所のこと。大浦崎収容所には、伊江村、今帰仁村、本部町の住民が運送され、収容は 1945 年 6 月 27 日に完了したとされる。（沖縄県立埋蔵文化センター編『沖縄県の戦争遺跡』平成 22-26 年度戦争遺跡詳細確認調査報告書、沖縄県立埋蔵文化センター刊、2015。286 頁。）

[26] 民間人を収容所した本来の目的は、収容した人々を保護することにあるのではなく、あくまでも統治することにあった。（Island Command Military Government Headquarters “History of Military Government Operation Okinawa, 1 May to 31 May 1945 (L-30 L-60) ” 10 June 1945『沖縄戦後初期占領資料 第 10 巻』緑林堂、1994。54 頁）民間人はシビリアンと呼ばれ、作業現場などでは上着の背中に CIV とペイントされた。（名護市史編さん委員会『名護市史 本編 6 教育』名護市役所、2003。147 頁）

[27] 2003 年にアメリカで発見された日本軍の作戦文書から、男性住民が根こそぎ防衛隊員に動員されたこと、日本軍が住民に偽装して米軍を攻撃する計画を立てていたことなどが、多くの犠牲者が出た一因であることが分かった。(NHK その時歴史が動いたさとうきび畑の村の戦争～新史料が明かす沖縄戦の悲劇～,2004 年放映)

[28] 収容所への輸送にはトラックや LST（上陸用舟艇）が使われた。（名護市史編さん委員会『名護市史 本編 6 教育』名護市役所、2003。146～147 頁。）

ら、住民をコントロールするために、振り分けて送ったその収容所の１つがここにあったってことか。
（諸喜田）そーう、そうそういうこと。で、あの一屋嘉(ヤガ)っていう部落あるでしょ。
（諸喜田）あっちも、収容所。で、ここの捕虜を集めて。で、どこかあの一ハワイとかに、連れて行かれた人もいた[29]。
（渡辺）なるほどなるほど、それがやがては日系人としてハワイで暮らすことになったんですね。
（諸喜田）そう、そうそうそうそうそう。

(学生に向けて渡辺による説明)
結局戦争っていうのは、勝ったほうと、負けたほうがでるわけだ。そうすると、負けたほうっていうのは勝ったほうに占領されるわけだから、要するにその、民衆として認められないわけだから、あくまで戦勝国の、なんだろう、駒として使われている。まあ、収容されるという。お前らは負けた国の民なんだから、コントロールするよということで収容される。だから、強制的に自分の故郷を追われてこっちに移動させられたっていう話。

（諸喜田）そういうことです。
（渡辺）で、収容されたのは、諸喜田のおじいと家族もですね。
（諸喜田）家族全部。
（諸喜田）で、いとこ連中も全部。いとこたちの親は全部戦地に行ってるから。その間私の親父が全部彼らの面倒見ることになった。
（渡辺）まあ戦争が終わって収容所も解体…して、暫くその収容所にいたけど、収容されていたけど、占領政策がだんだん緩んできて、えーっと解放されたのは何歳ぐらい、高校生くらいの時ですか。
（諸喜田）えーもっと下です。
（渡辺）もっと下。ふーんじゃ中学生になったかなんないかくらいか。
（諸喜田）そうそうそう…そう。そのくらいかな
（渡辺）そんで収容所から解放されて、ここ辺野古で暮らし始めた。
（諸喜田）いやいやまず自分の部落帰ってね…それから学校も出たりして、あちこちで就職したりして。
（渡辺）なるほど。今帰仁に一回戻って。
（諸喜田）そうそうそうそう。
（渡辺）ふーん、そっかそっか。だから元々故郷の今帰仁にみんなで戻ったっていうことだ。
（諸喜田）みんな…各部落にね。やっと戦争終わって安定したもんだからね。
（渡辺）占領下、当時のアメリカは怖かったですか？
（諸喜田）あー怖かったですよ。今見たらもう本当沖縄人と一緒の身長だけど、昔のアメリカ人は倍ある。
（渡辺）大きい大きい、うん。
（諸喜田）ほんと黒人なんか見たら顔が怖かったの。けど今、今の外人はほんとにもうミックスされてほんとちっちゃいさあね。あなたとか若いより人より小さい人もいるし、昔はもっと、大きい大きい。
（渡辺）うーん…子ども心にはウワーってなりましたね。
（諸喜田）またエピソードもあったわけ。黒人は暗いと分からんけどあの眼がピカピカだから夜も見える。ちょっと怖かったね。
（渡辺）ふーむ。でまあ乱暴されたりっていうことは実際なかったんですか？そういう経験はなかったんですね。
（諸喜田）うんうん。
（渡辺）それはなかったんで、良かったですね。
（諸喜田）いちばん、だから日本兵が怖かったわけさあ結構。
（渡辺）日本兵が怖かった。うーん…何回も出てくるね、その話がね。
（諸喜田）あいやーもう大変だ。だから外人よりは、あともう日本兵の残党。収容所に集めてから、この…あちこち山の中に。
（渡辺）潜んでるんだよね。うん、うん。
（諸喜田）それをだから、食べ物持って歩いてのを取ったり、日本刀振り回す[30]もんだから、怖くて逃げる。

---

[29] 屋嘉収容所は主な収容所の一つであった。屋嘉収容所は、軍人・軍属捕虜を収容する PW 収容所としては最大であり、その他、読谷山村、北谷村、浦添村、那覇市奥武山が PW 収容所に当たる。（名護市編さん委員会『名護市史 本編 6 教育』名護市役所、2003。146～147 頁。）移住については、沖縄戦以前にも多くの人々が移住をしており、明治期から昭和にかけて増加している。多くの人々が経済的な理由で、ハワイや北・南米地域へ移住した。（沖縄県教育委員会『沖縄県史 各論編 6 移民』国書刊行会、1989。174 頁。）

[30] 投降しようとする際やスパイ容疑がかけられ、一般住民が軍刀で殺された例も多くある。投降しようとした一般住民二人を将校が軍刀で斬り殺した。（長田紀春・具志八重『閃光の中で』ニライ社、1992。131 頁。）ある住民が日本兵に「兵隊さんはどこにさがるんですか」とたずねたところ、軍刀で背中から斬り殺されたという例もある。（上勢頭誌編集委員会『上勢頭誌』。旧字上勢頭郷友会、1997。421 頁。）また、米軍に投降して保護された一

※このくだりは(1)に記載してある戦時中の話である
(渡辺による学生への説明)
南部戦線で戦争激しい時に、住民も逃げて、ガマへ隠れた時に、日本兵も一緒に逃げて来た。その時赤ん坊が泣きだしたと。そうすると泣き声がもれるとアメリカ軍に火炎放射器で殺されるかもしれないからっていうんで、泣いてる赤ん坊の口を日本兵が抑えて、抑えてるうちに赤ん坊死んじゃったって話も残ってるくらい。「お前、泣き出す赤ん坊出てけ！」と日本兵が、住民を外に追い出したりとかっていうんで、むしろ日本を守ってくれるはずの日本兵が住民を、守らなかったっていう…
（諸喜田）そうそう結構…そうだね。

（渡辺）学生のみなさんはどうですか。ここまで知らない話ばかりだったのでは？びっくりした人もいたかもしれません。その後戦争が終わって、収容所が解けて、就職したりして、それで諸喜田のおじいはこの辺野古に移ってきた。
ここからは本格的に戦後の話に移ります。

※以下に続く
沖縄現代史の描写-辺野古在住のあるおじいの証言「オーラルヒストリー」(2)-終戦から戦後の暮らし-

諸喜田俊正さんと
お話しを聞いたインターンシップ参加学生
(2023 年 2 月 4 日撮影)

付記
なお、倫理的配慮として、諸喜田さんには事前に「語りたくないことや、答えたくない質問などには答えなくてよいこと」を含めてインタビューを行った。本稿の掲載については、ご本人の許諾を得ている。

般住民が、米兵の頼みとして、山に隠れている人々に下山をすすめたところ、日本兵にスパイだとされて刺殺された例もある。（沖縄県教育委員会『沖縄県史 第 10 巻』国書刊行会、1989。576 頁。）